

「発信力の源は個人も組織も成長するワーク・ライフ・バランス」

佐々木常夫さんのお話を聴いて、共感と憧憬の念を抱きました。

共感した一つは、私自身もフルタイムの仕事をしながら、食べ盛りの子どもたちを育てており、毎朝の弁当と、会社を出たら一目散に帰って夕飯の準備をしなければならない日々を過ごしているからです。

もう一つは、私の育った家庭にもレイマンの弟がおり、彼が受ける社会からの迫害は家族に大変な重荷でしたので、佐々木さんが振り返る学校や家庭内の困難は、間違いなく我が家にも存在するものでした。

「私は仕事も家族も決してあきらめない」という副題にひかれて、出版間もない『ビッグツリー』を読んだとき、感動とともにぬぐえなかったのが、どうしてここまで佐々木さんが1人で頑張らなければならないのか、とても凡人には真似できない、という思いでした。

今回、直接お話を聴く機会を得て、質疑応答の中で佐々木さんが「もっと辛いのは自分ではなく妻だと気づいた。あのとき気づいてよかった」とおっしゃるのを聴き、不覚にも涙がこぼれました。救われた気持ちになりました。

同時に、週3回寝る所が変わった、という単身赴任生活が1年で終わられたのは会社の配慮があったのかな、と期待して名刺交換の際にお尋ねしたのですが、「そんな配慮はなく、たまたま必要になって呼び戻された」とのこと。会社組織の論理の中で生き抜いていくことの覚悟と苦勞を感じました。そうして頑張ってきたからこそその評価だったのですね。

でも、佐々木さんほど頑張れない人間は多いと思うのです。

家族に事情を抱えたり、ハンディを背負ったりした社員は、どこまで会社に伝えたらいいものなのか。たとえハンディを背負っても、働き続けて納税できる人が増えた方が、これからの日本の社会にとってはプラスだと思いますが、目先の利益を考える企業にとっては、メリットを見いだしにくいでしょう。

長時間、下手すれば泊り込みで会社に存在していることが評価につながる社風の中、子育てを自分でやる社員は会社にとっては「お荷物」視されているのが現状です。少しずつでも変えていかなければ、社会も会社も良くなるとわかってはいますが、あきらめてしまった方が楽だとも正直あります。

「逆風の場合こそ君を鍛えてくれる」「人は自分を磨くために働く」

提示していただいたアドバイスを励みに、逃げずに生きていたいと思います。